

259.5

146

259.5-146

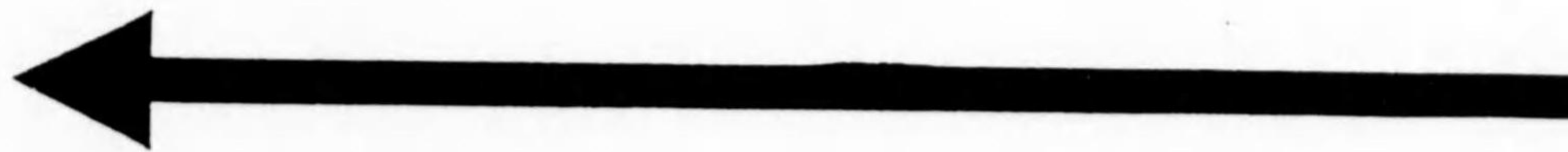


1200501349920

實業教育資料第二。上農寮の塾風教育

實業教育振興中央會編

始



25  
14

# 育教風塾の寮農上

校學業農那伊上縣野長

料資育教業實

20

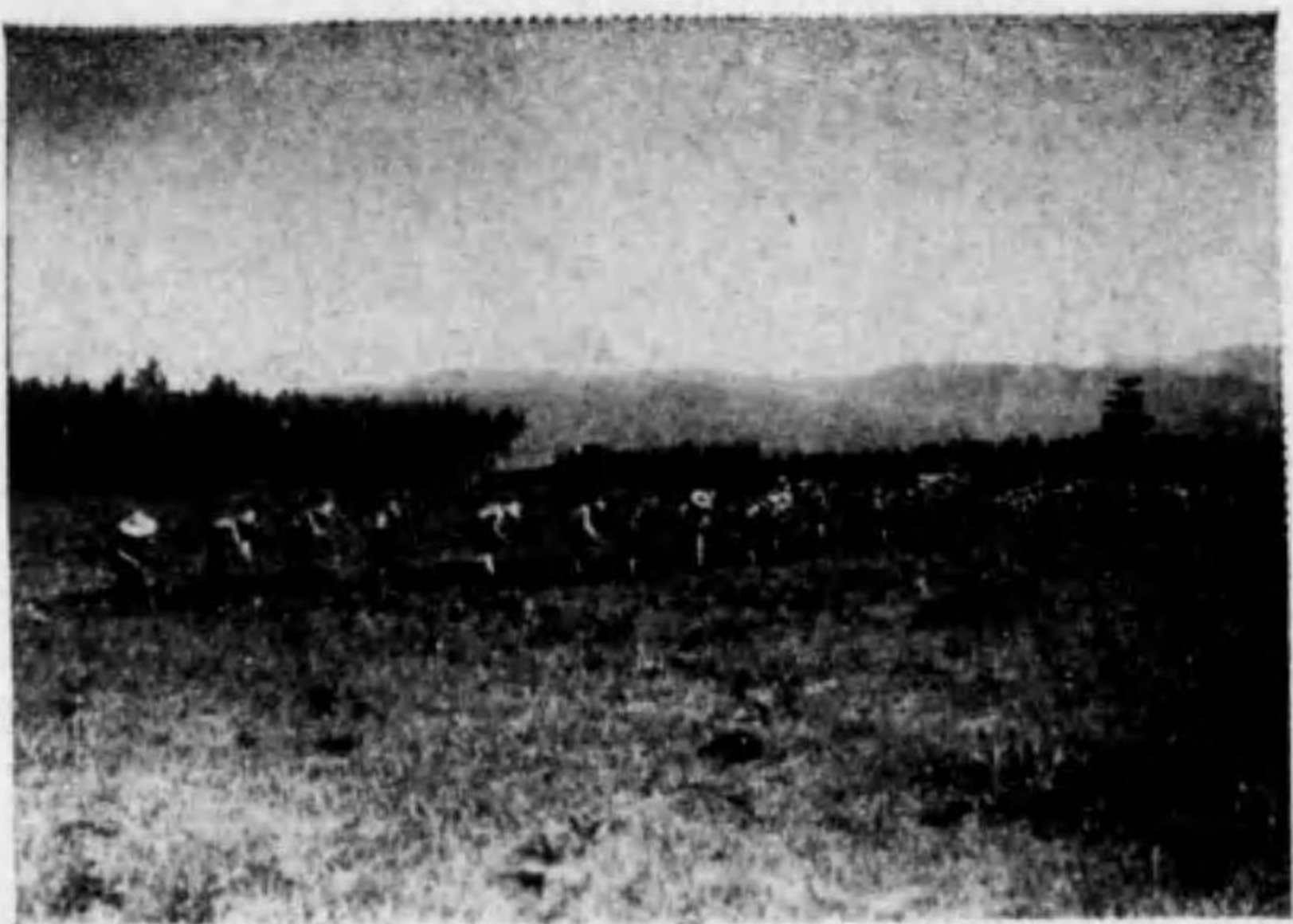
內省部文

行發會央中興振育教業實 團財  
人法

### 實業教育資料刊行の趣旨

實業教育資料は、戦力増強に關する重要施策に付、斯界の權威に執筆を乞ひ、以て教育關係者をして國家的に又、實業的に最喫緊重要な事項に付、正確なる知識を把握せしめ、學生々徒の教育指導に遺憾なからしむると共に、實業教育振興に關する斬新なる學說意見、顯著なる施設業績、外國事情等を紹介して、生産擴充・食糧増産の戦力増強に資せんとするものである。

即ち戦力増強實業教育對策の刷新意見と新教材の供給とを目的として、編纂するものである。



振り下す一畝にも  
米英撃滅の金剛力をこめて  
寮生の開墾作業

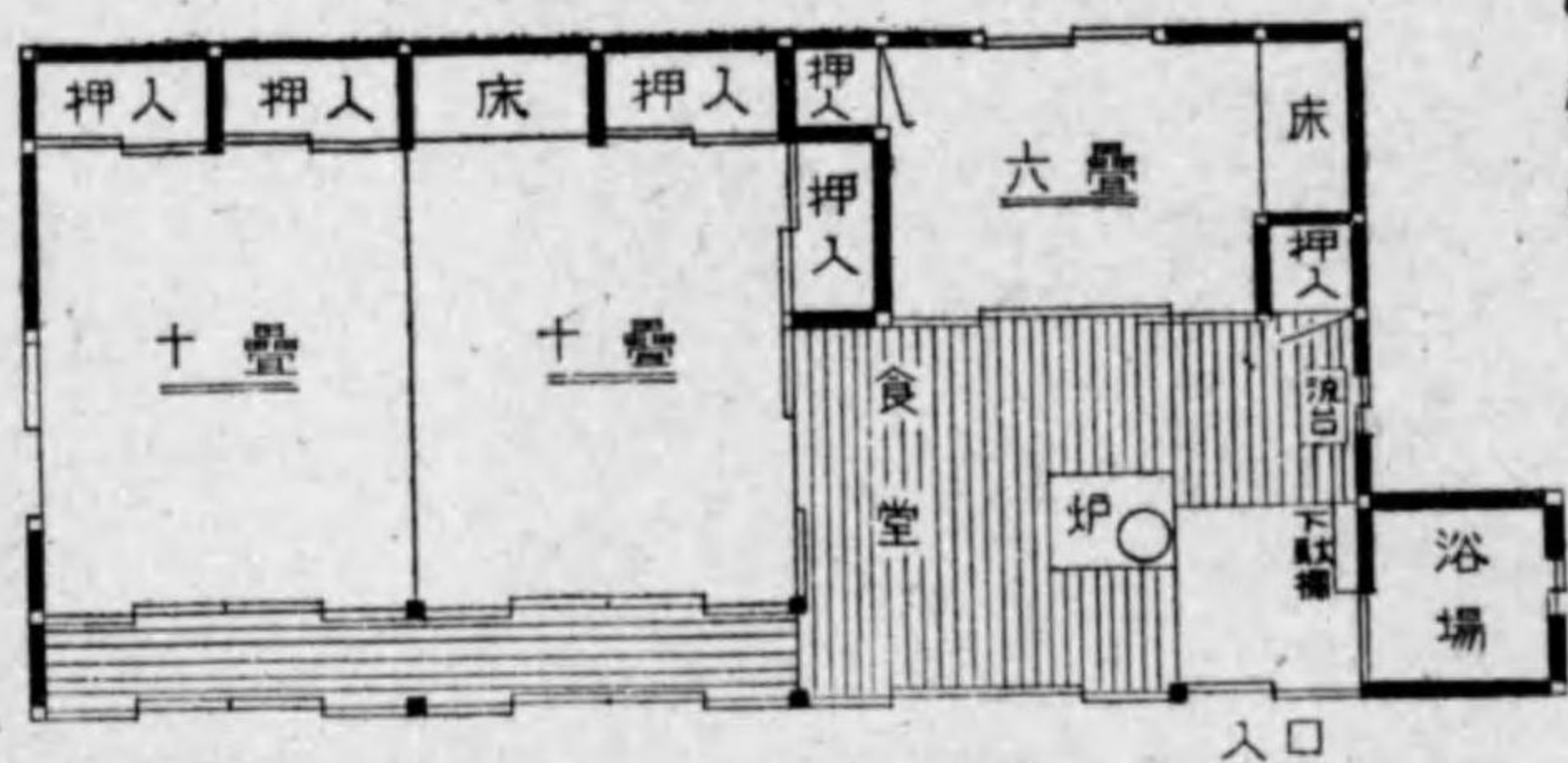


松林を背景に  
點綴する上農寮の全景



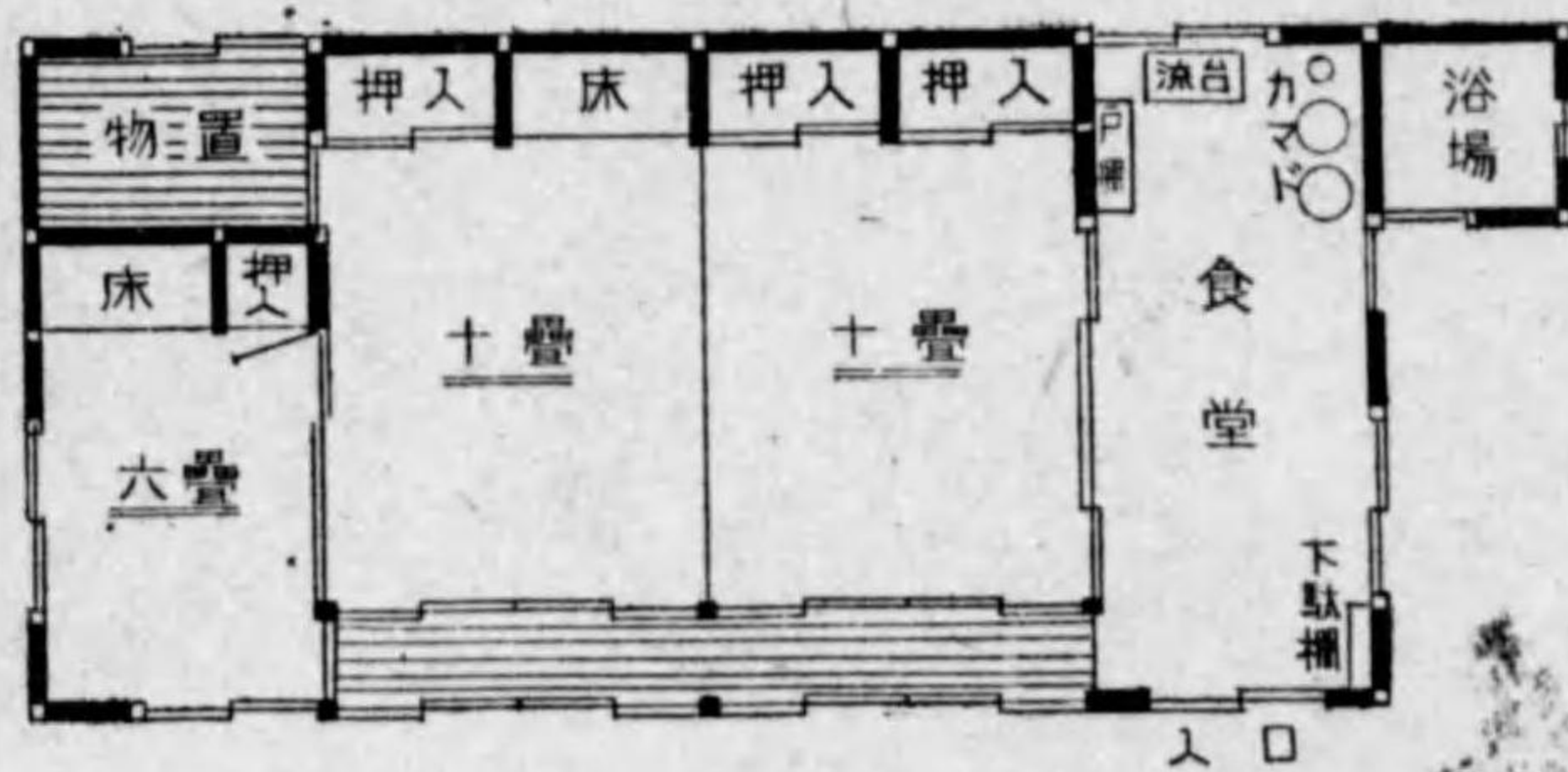
一握の稻にも農魂を  
傾けて、寮生の稻刈作業

上農寮舎平面圖



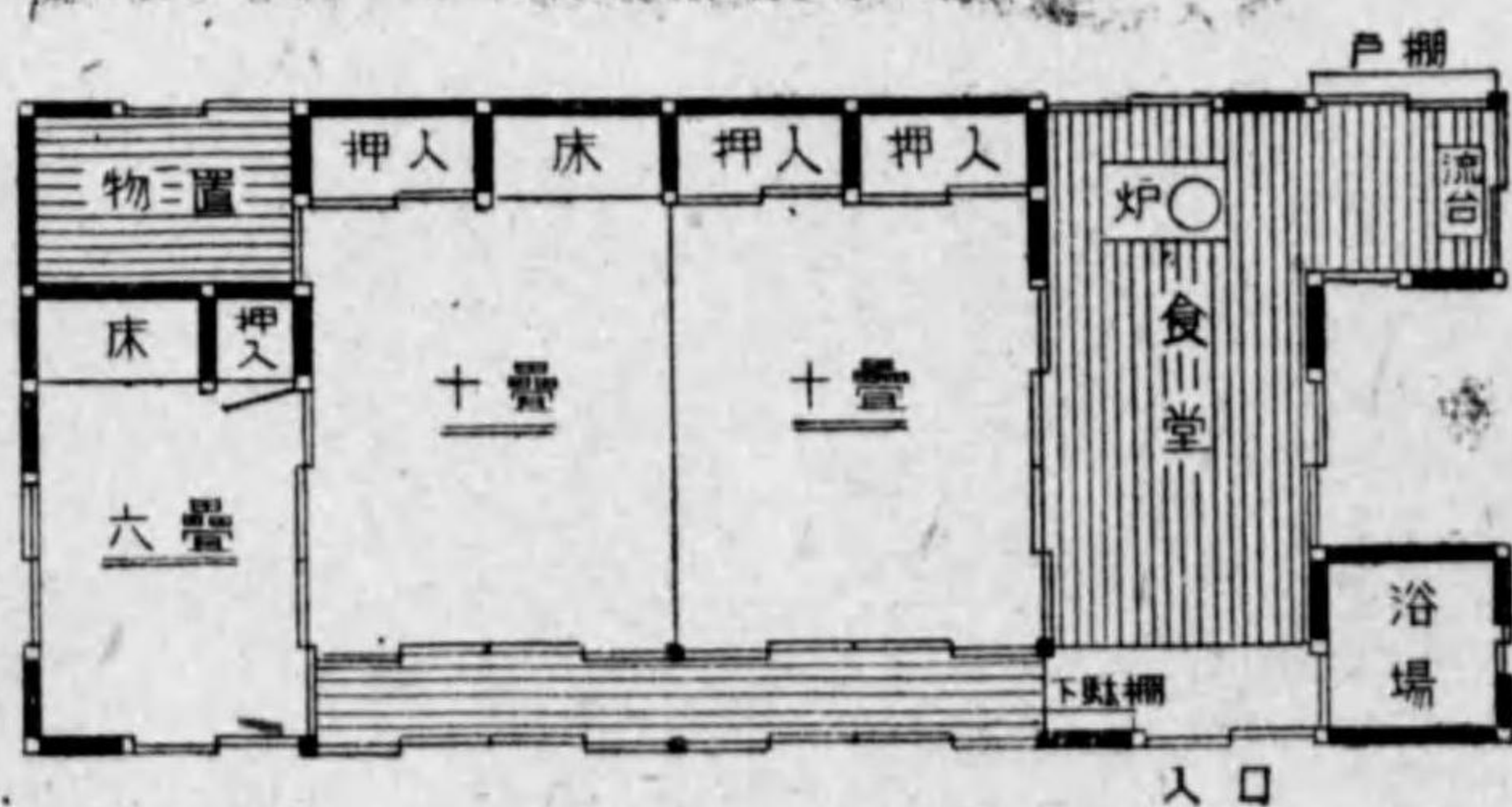
正大家  
誠敬家

二五五坪



明德家

二五五坪



極天家

二六五坪



清澄な明け行く大空の下  
眞に神に通ふ朝の神前行事

月曜夜の二宮夜話、論語等の後  
に精神鍛錬のため静坐が初めら  
れる



夜の黙習は教師も生徒と机をな  
らべて嚴肅に行はれる

### 上農寮に於ける塾風教育要旨

昭和十年四月、第一部（國民學校初等科卒業を以て入學資格とする五ヶ年課程）の教育内容を改革し、農業學科目並に技術的實習はこれを第四學年までに修得せしめ、第五學年にありては生徒全員を一ヶ年間「上農寮」に收容して、廣壯雄大なる農場と森幽嚴肅なる境地に於て農業綜合教育を施し、經營上の技能と迫力とを磨礪すると共に、師弟渾然一體となり起居寢食労働行事を俱にし、皇國農民精神砥礪の徹底を期したのが、これ上農寮の濫觴である。

毎年四月三日、第五學年生徒全員を各々その希望に應じ、次の各特色ある四ヶ農家に分ちて入寮せしむる。

- 正大家（稻作を根幹とし普通作物に重きを置く組織） 水田九反、畑地四反
  - 明德家（稻作を根幹とし果樹に重きを置く組織） 水田七反、園地三反
  - 誠敬家（稻作を根幹とし養蠶に重きを置く組織） 水田八反、畑地四反
  - 極天家（稻作を根幹とし養畜に重きを置く組織） 水田八反、畑地五反
- 右の各農家は主任教師一名、生徒十三名よりなり、夫々別棟の寮舎と農舎とを設け、師弟俱



進同行、嵩高醇美にして至誠盡忠の精神的家風を作興せしむると共に、合理的經營の實現を期してゐる。

上農寮の所在地は本校を距る三軒の地點にあり、廣大なる水田、畑地を有すると共に、森嚴なる境域にして、その構内森林に「中ノ原神社」を祀る。

毎朝四時半起床、神社前に於て、宮城遙拜、神社禮拜、國家齊唱、勅語奉讀、訓話等の行事が嚴肅に行はれ、月、水、金曜日には本校に登校して普通學の授業を受け、火、木、土曜日には各農家毎に經營實習に當る。

夕食後二時間に亘り水を打つた如き静けさの裡に眞劍なる黙習が行はれ、更に就床前、神社禮拜、御製朗詠等の行事により、皇國精神の砥礪を期すると共に、各農家主任は晝夜の別なく全身全靈を傾倒して生徒の薫化玉成にあたつてゐる。

「上農寮」教育創始以來茲に九ヶ年を経過し、その教育實績は歳と共に躍進を遂げ生徒の人物著しく上進し、眞に農業を愛好し、農業報國の信念に生き至誠盡忠の精神を體得するに至り、今や「宿泊訓練と綜合教育を根底とせる塾風教育に依るにあらざれば、徹底せる錬成は至難なり」との強き確信を得るに至つた次第である。

### 目次

第一章 序 論	一
第二章 上農寮教育の創設	七
一、長野縣上伊那農業學校の沿革	七
二、上農寮の創設	八
三、上農寮舎並に農場の建設	一三
四、上農寮塾風教育への支援	二一
第三章 上農寮塾風教育の内容	二六
一、上農寮の組織	二六
二、錬 成	三〇
三、學 修	三七

四、實 習……………三九

五、保 健……………四三

六、主任教師……………四五

七、學年短縮による新課程……………四六

第四章 上農寮塾風教育の實績……………五〇

一、皇國精神の砥礪……………五一

二、農業愛好心の涵養……………五一

三、師弟人格接觸の徹底……………五二

四、個性教育の徹底……………五四

五、主任教師の人格發揮……………五五

六、學習と就眠……………五七

七、指導能力鍊成……………五八

八、行軍力の鍊磨……………五八

九、開 墾……………五九

一〇、父兄の感謝……………六〇

一一、卒業生の動向……………六一

一二、入學志願者の増加……………六四

第五章 大陸科の加設……………六五

第六章 上農寮の光榮……………六七

(附) 上農寮歌……………七〇

# 上農寮に於ける塾風教育

長野縣上伊那農業學校

## 第一章 序 論

農村は實に國家の根幹にして、國民精神の源泉、戦力増強の根柢である。

而してこれを振興し國本を不拔に置くの途は政治に、經濟に、技術に、幾多方途の存すべしといへども、結局その根本は「人」の問題に歸着せざるを得ず。洵に崇高なる品性と鞏固なる信念と、鍛達せる技能とを把持し、皇國農村の使命を深く自覺し、至誠盡忠の精神に徹する忠良なる皇國農民を鍊成することは、大東亞戦争下、邦家最大の要務といはねばならぬ。

この秋に當り、深く靜かに本邦農業教育の現状を展望すれば、將に時代は農業教育に對し、一大改新を加ふるの要、切なる時機にあるを念はしむ。

こゝに農業教育革新上核心とも目すべき諸點をあぐれば次の如くである。

上農寮に於ける塾風教育



(一) 知識偏重の教育より人格錬成教育へ

單調なる農村にあつて、夙夜農業勞働に従事し、これを熱愛し、これに精魂を傾倒し、皇國農民たるの人生觀に徹し、勇躍して戦力増強の根柢を啓培し、眞に皇國負荷の任に堪ふべき有爲の人材を錬成するには、從來の如き知識偏重の教育では到底その目的を達成することは不可能である。

將に知的教育より人的錬成教育に轉進せねばならぬ秋である。而もその教育たるや、机上の理論教育にあらずして、「師弟人格の接觸」による「錬りあげる行の教育」でなければならぬ。

由來、一般中等學校は、學科擔任主義を採り、各學級に對し多數の教師が學科別に擔當せるため、一級訓育の中心者たる學級主任が、その學級に臨む時間は毎週僅かに數時間に過ぎず、従つて生徒との接觸機會極めてすくなく、生徒の個性を知悉して、之に適切なる訓化を施すことは到底至難であつて、眞に崇高なる親心を持ち、身を挺して生徒を薰化玉成せんとする強烈なる熱意と氣魄とに缺くる所あるを免れない。

又教壇よりする「口の教育」は青年にとつて寔に無力なもので何等深刻なる訓化を期待し得ない。惟ふに眞に徹底せる精神教育は、師弟相接觸し、「行」を通し「宿泊」を通し心魂を打ち込んで錬

り上げる教育でなければならぬ。

而もこれを行ふには從來の通學教授制度では至難であつて師弟渾然融合一體となり、起居寢食勞働行事を共にし、苦樂を頌つ共同生活中に、教師の人格が生活の全面を通じて生徒に浸潤して行く本邦固有の塾風教育を基調とする宿泊訓練に據らねばならぬ事を確信して疑はざるものである。

(2) 斷片的教授より綜合教育へ

元來、一般農業學校に於ける農業教育は、各擔任教師に依り専門的に行はれ、所謂「農學」の教授にして「農業」の教育にあらざるの觀あり。例へば作物擔任教師は作物栽培のみに就きて教へ、畜産擔任教師は畜産の限界内に於て教授する如く、専門的に斷片的知識の注入教授たるに過ぎぬ。即ち農業技術を斷片的の知識として一應授けるに過ぎずして、「眞の農業者を錬成せむ」とする徹底的の貫行精神に乏しい。

かくして卒業生は各専門技術に對しては克く修得し、所謂「農學」は會得すれども綜合經營の能力に缺くる所あり、従つて歸郷して、父祖の信頼を得て農業の全經營を委ねられ、勇躍して經營に當るの實力と氣魄に乏しき憾がある。故に在學中に、現代科學に立脚せる農業各般の知識技術を修

得せしむると共に、最上級に於ては、綜合經營の修練を施し、以て經營能力と精神とを鍊成することが極めて緊要であると信ずる。而して徹底せる綜合經營の修練は、單に晝間一定時間の實習訓練のみにては到底至難である。

抑々眞の經營は、むしろ朝夕に於ける作物、家畜の管理を以て緊要とする。然るに從來農業學校の實習は晝間の炎天下に於てのみ實施せられてゐる。炎熱灼くが如き時刻に於ける施肥、灌水等は、いたづらに作物を傷つくるのみにして、決して優良なる發育を遂げしむる途にあらず、施肥、灌水、害蟲驅除、草刈の如きは寧ろ夕刻若しくは朝露を踏んで行ふのが、本邦農業の自然の道である。

殊に養蠶、養畜に至りては、朝夕を除外しての經營は絶対に存立し得ないのである。

故に眞の綜合經營能力の修練には、是非生徒全員宿泊の制度を採用せねばならない。

### (3) 「型」の教育より「迫力」の教育へ

今日、全國著名の、所謂優良農業學校と稱せらるゝものを觀るに「型」の教育の範疇に在るもの尠しとしない。則ち校内の隅々まで一糸亂れず整頓され、甜めたる如く拭ひたる如く、一點のアラなく、全く無疵であり無難である。しかしその内容は箱庭式農場に「型の實習」「模倣の農業」が行

はるゝのみにして、校内何處にも眞に強き「力」を見出すことが出來ない。かく農學を目標とせる模型式の教授訓練にては、農に關する「物識り」を養成することは可能なるも、眞に大戰下の農村を擔ひ、眞に皇國負荷の任に堪ふる強き精神的迫力を練りあぐるは至難の業と言はねばならぬ。

時代は將に箱庭式農場に於ける「型の教育」より脱し、須らく廣壯雄大なる農場を設定し、その廣濶なる原頭に立ち、聖なる農の業を通じて「雄渾なる精神、氣魄」を鍊成する教育を渴望しつつあるにあらずや。

而して眞に強烈なる精神的迫力は、更に宿泊塾風教育による「肚の修養」と「信念の確立」とに相俟つべきである。

### (4) 革新せられたる農業教育

以上各項に亘る農業教育革新に關する理想の實現はいづれも結極は、宿泊による塾風教育により始めてその全きを期し得らるゝを信ず。

茲に於て本校は、昭和十年四月、第一部（國民學校初等科修了を以て入學資格とする五ヶ年課程）の教育内容を改革して實業學科目並に技術的實習は之を第四學年迄に修得せしめ、第五學年に於て

は生徒全員を一ケ年間寄宿舎（上農寮）に收容し、廣壯雄大なる農場に於て、農業綜合教育を施し、經營上の能力と迫力を磨礪すると共に主任教師をして生徒と起居、寢食、労働を共にせしめ、切磋砥礪以て人格陶冶の徹底を圖り、皇國負荷の任に堪ふべき有爲なる人材の鍊成を期してゐる。

本制度を要約すれば、

一般學科の修得——全學年

農業科目の修得——第一學年より第四學年迄

精神教育の徹底、經營能力の徹底——第五學年（上農寮塾風教育）

(5) 上農寮塾風教育理念

第四學年迄に農業科目を全部修得せしめ、第五學年に於ては生徒全員を一ケ年間「上農寮」の四ヶ農家に收容し、師弟渾然融合一體となり起居寢食労働行事を俱にする塾風教育により、教育勅語の聖旨を奉體し、特に皇國農民精神砥礪の徹底と、農業綜合經營能力鍊磨の徹底とを期し、至誠盡忠の精神に徹する忠良なる皇國農民を鍊成し、一は内地農村の中堅たらしむると共に、一は大東亞諸民族指導啓發の中核たらしめんとするにある。

## 第二章 上農寮塾風教育の創設

### 一、長野縣上伊那農業學校の沿革

本校は長野縣に於ける農業學校中、最古の歴史を有する學校にして、創立以來四十八ヶ年間に輩出せし卒業生は三千を算し、縣の内外農業界に貢獻せる所すくなからず。

明治二十八年五月一日郡立上伊那簡易農學校として設立せられ、伊那町狐島の假校舍に於て開校し、同二十九年四月現在の位置に校舍新築落成移轉す。

明治三十二年四月甲種農學校に組織を變更し、同三十七年四月縣立に移管せらる。

大正十二年四月學制を改正し、第一部（國民學校初等科修了者を收容し修業年限五ヶ年課程）第二部（國民學校高等科を收容し修業年限三ヶ年課程）を併置す。

昭和七年三月現校長村上明彦任命せらる。

昭和十年四月學則を改正し「上農寮」塾風教育を創設し、昭和十一年七月南箕輪村地籍「中ノ原」に上農寮舎建築竣工す。

昭和十五年四月興亞科新設のため第一部學級増加を行ひ、定員六百五十名とす。

昭和十六年十一月軍事參議官鹽澤海軍大將上農寮に講堂「清心寮」を寄贈せらる。

昭和十七年六月十六日長くも上農寮に侍從御差遣の光榮を賜はる。

## 二、上農寮の創設

### (一) 設立過程

時代の進運に伴ひ現在の農業學校教育の物足らなさを痛感せる本校は、如何にもして「農業報國の信念に生き、至誠盡忠の精神に徹する有爲なる人材を鍊成すべき教育施設」を産み出さん事を多年焦慮せし結果、遂に農業教育革新の核心點探求の確信を得たるを以て、茲に革新教育を本科過程に實施するに先立ち、その準備工作として、昭和九年四月、同窓會事業として「上農塾」を新設し、新卒業生五名を同窓會記念館に收容し、塾風教育を開始す。

かくして一ケ年間に於ける塾生の眞剣なる修練の結果は農業經營並に人格陶冶の上に、優秀なる部面の存在することを確認せるを以て、茲に昭和十年四月「上農寮」塾風教育施設の創設を敢行す

るに至つた。

### (2) 上農寮塾風教育施設の要旨

本校第一部（國民學校初等科修了者を收容し修業年限五ケ年の課程）の教育内容を改正し、第四學年迄に農業科目を全部修得せしめ、第五學年に於ては生徒全員を一ケ年間寄宿舎「上農寮」に收容し、農家經營實習を課し、綜合經營能力を修練せしむると共に、主任教師をして生徒と起居、寢食、労働を俱にせしめ、切磋砥礪以て人格陶冶の徹底を圖り、忠良なる皇國農民の鍊成を期す。

### (3) 學則改正

塾風教育實施のため本校第一部の教育内容の改革を必要とし、昭和十年一月文部省督學官岡村精次氏を招聘し詳細閱覽の後、教育内容改正に對する意見を求めたるに、深く賛意を表せらる。

更に同年二月同窓會役員、上伊那郡教育會役員並に本校第一部第四學年生徒父兄の參集を求め、第一部教育内容改正の意向を傳へし處、いづれもその趣意に深く共鳴し實現方を熱望するに至つた。茲に於て第一部學則改正を本縣に申請し、文部省の認可を得て、昭和十年四月一日長野縣令第八號を以て學則改正を公布せらる。

而して學則改正による農業學科目並に實習課程を舊課程に比較し、その要點を記すれば次表の如し。

學年	從來ノ課程	改正ノ課程
第一學年	農業大意	蔬菜、花卉
第二學年	農業大意	蔬菜、特用作物
第三學年	作物、花卉、林業	作物、養蠶、林業
第四學年	蔬菜、畜産、養蠶	果樹、畜産、加工
第五學年	果樹、加工	綜合經營

改正せられたる課程次の如し。

(イ) 學科課程

學科	學年				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	一 道德ノ要旨	一 同	一 同	一 同	一 同
公民科	二	二	二	二	二
國語	六 文法、讀法、習字	六 同上	五 講讀、習字、作文	三 同上	三 同上
算術・代數	三	三 代數、珠算	三 代數、幾何	三 同上	三 幾何、三角
物理・化學	二	二 化學	三 物理、化學	二 物理、氣象	
博物	二 植物	二 動物	二 礦物、生理		
地理・歴史	四 日本歴史	四 外國歴史			二 地理概説
圖畫	一 自在畫	一 同上			
英語	四 讀法、習字	三 同上	二 同上	二 同上	二 同上
體操	四 體操、武道	四 同上	四 同上	四 同上	四 同上
耕種	二 園藝、蔬菜、花卉	四 特用作物	四 作物汎論、普通作物、病蟲害、林業	四 園藝、土壤、肥料	
養畜		一	二 養蠶	二 養蠶、畜産	
農産加工			一 農産加工		
農業經濟			三	簿産農業組記	簿産農業組記

植	計	無定時	二八	二八	二五	二四	一植民大意
實	驗	同上	同上	同上	同上	同上	二〇
實	習	同上	同上	同上	同上	同上	同上

(ロ) 實習課程

種 類	學 年				
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
作物栽培	葉菜類	特用作物	普通作物	各種試驗	
蔬菜栽培	莖菜類	果菜類	硝子室栽培		
果樹栽培	溫室栽培		硝子室栽培		
花卉栽培	花壇栽培		植樹		
林業		林産加工			
養蠶		具製造、修理	蠶種製造	母蠶種検査	
畜産			飼養管理		
農産加工		蔬菜加工	木穀加工	畜果加工	

測	量	石油發動機	高低測量
農	具		
經	營		
實	習		

○普通作ニ重キヲ置ケル  
○經營ニ重キヲ置ケル  
○園藝ニ重キヲ置ケル  
○養蠶ニ重キヲ置ケル  
○養畜ニ重キヲ置ケル

(4) 上農寮の開設

既に學則の改正成り、茲に革新教育實現のため、取敢へず校友會記念館を寮舎に充て、昭和十年四月五日五學年生徒全員を收容し、入寮式を舉行し、上農寮教育の第一歩を踏み出したのである。

三、上農寮舎並に農場の建設

(一) 寮舎建設の位置選定

上農寮に於ける塾風教育

上農寮教育創設後、日尙淺きに拘らず、その教育成績顯著にして眞に豫期に優れる進境を示せるを以て、昭和十年夏寮舎の建設を計畫するに至つた。

寮舎建設に當り、先づ考慮すべきは建設位置の問題にして、將來上農寮教育の成績發揚如何は建設位置と至大の關係を有する事を信じ、これに深甚なる考究を重ねた。

而して上農寮教育實施上、理想的位置とも謂ふべきものを考察して次の如く案を樹てた。

(イ) 學校及市街地と隔離せる境地なること。

(ロ) 水田經營の可能なる廣大なる集團地たること。

(ハ) 高臺地にして眺望雄大に、且つ環境森嚴神聖なること。

(ニ) 農業經營の垂範は、直に地方一圓に普及し得る地たること。

右の理想に適合すべき建設位置を選定するため、之が探查に數ヶ月を費したのである。幸にも伊那町、南箕輪村、西箕輪村の三ヶ町村は本教育施設に多大の賛意を表し、「中ノ原」共有地五町歩を農場設定地として、また南箕輪村は原野二町歩を建物敷地用として寄附採納方を申出られた。該地籍の位置は、本校を隔る二十五丁の地點にあつて、山林原野を開墾し水田となしつゝ、ある西天龍耕

地整理組合地區一千二百町歩の中央にあり、水田經營上絶好の適地なるのみならず、西方に連続せる三千町歩の森林は開墾可能地でもあつた。

從て上農寮の農場成績は、直ちに一千二百町歩の水田と三千町歩の未墾地に對し試練と垂範の實を擧ぐるを得たのである。

更に寮舎建築用地は高臺地にして、東南に廣濶たる伊那谷を俯瞰し、遙かに東駒ヶ嶽、仙丈ヶ嶽に相對し、寮舎背後には鬱蒼たる松林地帯を負ひ雄大にして嚴肅神聖なる靈地でもあつた。

## (2) 中ノ原神社奉祀

昭和十一年、在校職員生徒並に上農寮第一回卒業生の據金による淨財を以て、全校崇敬の中心たる「中ノ原神社」を、上農寮中央森林内に建立し、天照皇大神を奉祀し、敬神思想の涵養に資す。

## (3) 上農寮舎の建築

昭和十年八月、大村長野縣知事は上農寮假宿舍に於ける修鍊狀況を視察し、深く感動し、上農寮新築を決議せられ、その經費として昭和十一年度臨時部豫算を以て三千五百圓、經常部豫算を以て六百圓を令達され、更に文部省より上農寮設備購入費として特に國庫補助金一千五百圓の交附を受

け、合計五千六百圓を以て昭和十一年四月建築工事に着手、七月十日三戸農家（正大家、明德家、誠敬家）及び附屬建物十五棟竣工し、同日假宿舍より移轉す。  
昭和十二年本縣經常部豫算六百圓、文部省國庫補助一千圓の交付を受け、極天家を建築す。  
建築物概要次の如し。

項目	種目	坪數	單價	總價
正大家 (第一農家)	住	二五・五〇	二四・一五	六一九・〇〇
	便所	一・七五	一六・〇〇	一・二〇〇
	收納	五・〇〇	一〇・〇〇	五〇・〇〇
	堆肥	四・〇〇	一〇・〇〇	四〇・〇〇
	馬舎	三・〇〇	一〇・〇〇	三〇・〇〇
	豚舎	二・〇〇	三・〇〇	六・〇〇
	鶏舎	三・〇〇	四・三三	一三・〇〇
	溫床	二・〇〇	五・〇〇	一〇・〇〇
	肥溜	一・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	計			七九〇・〇〇

明德家 (第二農家)	住		便所		收納		堆肥		豚舎		鶏舎		溫床		肥溜	
	室	所	室	所	舎	舎	舎	舎	舎	舎	舎	舎	舎	溜	溜	
誠敬家 (第三農家)	二五・五〇	一八・〇〇	一八・〇〇	四・〇〇	四・〇〇	四・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	三・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	二・〇〇
	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五	・七五
	二四・五五	一六・〇〇	一六・〇〇	一八・六〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	二四・一五	一六・〇〇	一六・〇〇	一八・六〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	六二六・〇〇	一一二・〇〇	一一二・〇〇	二二五・〇〇	四〇・〇〇	四〇・〇〇	四〇・〇〇	六・〇〇	一三・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	九八二・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	六一九・〇〇	一一二・〇〇	一一二・〇〇	二二五・〇〇	四〇・〇〇	四〇・〇〇	四〇・〇〇	六・〇〇	一三・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	三三三・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	四〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇
	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇	一〇・〇〇





風を醸成し易く、崇高にして落着きのある寮風の作興を期すること困難なるを以て、各農家毎に別棟の宿舍を建築し各主任教師を宿泊せしめた。

(口) 各農家は地方普通農家の様式に準じ建設せしこと。

各農家は地方普通農家に準據し、之に改良を加へて建設し、生徒居室は十疊二室を以て之に充て、疊敷となし、床前を設け、更に神棚を設けた。

(ハ) 炊事場及食堂を共同とせずして、各農家に設備せしこと。

炊事を共同する時は勞力、薪炭費、器具費等を節約し得ると雖も、各農家を單位とせる消費經濟の研究不可能となり、尙、日日各農家の作業終了時刻異なるを以て、食堂を各農家毎に設け、併せて食事を通じての修練を遺憾なからしめんことを期した。

(ニ) 農舎を各農家毎に建設せしこと。

(ホ) 講堂を建設し、和風疊敷となし床前を設けしこと。

精神訓話、靜坐等を行ひ精神修養に資せしむるため、落着のある和風疊敷とし床前を設け、全級一列に輪坐せしむるため四十疊となした。

(ヘ) 主任住宅を構内に建設せしこと。

主任教師の住宅が寮舎より遠隔なるときは、師弟人格の間斷なき接觸に不便なるを以て、構内に主任住宅を建設し、家族全員を居住せしめ、朝夕晝夜を問はず生徒の鍊成に至心全力を傾倒するを得しめた。

(5) 農場の開設

水田は西天龍整理組合地區一千二百町歩の中央にあり、明治時代より大正年代迄全上伊那郡國民學校聯合の運動會を舉行した一萬五千坪の集團原野にして意義深き教育道場でもあつたが昭和十年三月より全校職員生徒の集團勤勞作業により開墾せられ、昭和十四年三月開田工事を完成。

畑地は水田に近接せる寮舎敷地周圍の松林を開墾したものである。

#### 四、上農寮塾風教育への支援

上農寮教育の順調なる進展は、學校當局の努力と共に、次記諸方面の深甚なる共鳴と熱烈なる支援の結果に據るものである。記して茲に感謝と敬意を表する次第である。

(一) 文部省 昭和十年一月上農寮創設に先立ち、岡村文部省督學官は特に本校に出張し、その實情を視察し、上農寮創設に關し深厚なる賛意を表し教導す。

岩松文部省農業教育課長は上農寮創設直後たる昭和十年八月及び同年十一月の二回來校指導、更に昭和十一年十月上農寮落成式に臨場し、本教育を激勵す。

昭和十二年七月山榘文部省督學官は上農寮を長時間視察し、寮生に對し熱烈なる訓話を行ひ多大の感激を與ふ。

昭和十三年八月文部省實業學務局官坂屬は來寮の上特に宿泊し、生徒と起居、寢食を俱にし、且つ熱心なる講話を行ひ寮生を奮起せしむ。

上農寮創設にあたり、文部省に於ては備品購入費に充つるため實業教育國庫補助金として、昭和十年、昭和十一年、昭和十三年、昭和十五年、昭和十六年、昭和十七年の六回に亘り、補助金を下附し、本教育の伸張に對し深甚なる援助を與ふ。

昭和十六年十一月鹽澤大將寄贈講堂落成式にあたり、高瀬文部省農業教育課長は來寮の上、特に寮内に宿泊し、生徒と起居寢食行事を俱にし且つ塾風教育に關する信念を披瀝し熱烈なる訓辭を與ふ。

ふ。

昭和十七年八月關口文部省實業學務局長は武田督學官と共に來寮せられ、寮内尙師舎に宿泊の上、寮生に對し懇篤なる訓示を與へられ寮生の信念を培ふ。

(2) 長野縣當局 昭和十年八月、祈願祭のため諏訪滞在中の大村長野縣知事は突然來校、上農寮假宿舍を詳細視察せる結果深く感動し、寮舎建築豫算案を通常縣會に提案し、その議決を経て新築を決行す。

昭和十一年十月、近藤長野縣知事は上農寮落成式に臨場し、更に昭和十二年十一月詳細視察の上寮生を激勵す。

昭和十三年十一月、前大村長野縣知事は長驅來寮し、長時間視察し、寮生に對し熱烈なる訓示を行ふ。

昭和十四年八月富田長野縣知事、昭和十五年十一月鈴木長野縣知事來寮し、詳細視察し、寮生に對し長時間熱誠なる訓示を行ふ。

昭和十七年六月十六日、長くも上農寮に侍從御差遣に當り、永安長野縣知事は戸田侍從を御案内

來寮視察せらる。更に大陸科宿舍建築豫算案三萬圓を通常縣會に提出し新築を決定す。

昭和十八年六月十六日郡山長野縣知事は侍從御差遣拜受一周年記念式に臨場せられ、寮内尙師舎に宿泊の上、生徒と起居、寢食、勤勞、行事を俱にせられ、且つ訓示を行ひ寮生に深刻なる感動を與ふ。

更に同年十月十一日上農寮大陸科寮舎上棟式に態々臨場し、懇篤なる訓示を行ひ、且つ四家の新寮舎に對し夫々神州家、千秋家、八州家、六合家と命名す。

野間、物部、西岡、久尾、中川の歴代學務部長、樋口、吉澤、佐藤の歴代學務課長、川崎、山田、土屋、二宮、小杉、藤原、清水の各視學は何れも屢々來寮し、宿泊の上生徒と起居寢食を俱にし、熱心なる指導を行ふ。

(3) 實業教育振興中央會 昭和十四年一月、實業教育資料第三輯として「農業學校の塾風教育」なる冊子を出版し、廣く全國各方面に配布し、實業教育振興に資すると共に本教育を激勵す。

昭和十六年八月、實業教育振興中央會並に長野縣實業教育振興會共同主催の研究懇談會を上農寮に開催し、來賓三百名出席、倉橋常務理事、宮坂主事は關口實業學務局長、武田督學官と共に來寮

し、講演を行ひ且つ指導激勵す。

(4) 上伊那郡教育會 上農寮教育施設の計畫に對し、上伊那郡教育會は深厚なる賛意を表し、その創設を熱望し、更に昭和十一年寮舎建築設計の如き、同會役員會の意見に負ふ所大である。

爾來役員は屢々來寮宿泊後援す。

(5) 地元町村 昭和十年八月、上農寮建設位置選定に當り、地元伊那町、南箕輪村、西箕輪村の三ヶ町村は「中ノ原」共有地五町歩を農場設定地として、南箕輪村は原野二町歩を建物敷地として提供し、合計七町歩の宏壯雄大なる青年修養上並に農業經營上絶好の適地を集團地として寄附。

更に昭和十五年四月大陸科新設に當り、南箕輪村は上農寮隣接原野十町歩を無償寄附し、伊那村は教室新築費五千圓を提供す。

昭和十六年十一月上伊那町村長會は大陸科新設建築費一萬六千圓を寄附す。

(6) 同窓會 本校卒業生は、本施設に對し深き理解を以て賛助し、就中上農塾は同窓會事業として、その別途積立金の融通を得て開設を見た。その他同窓會役員は本施設の進展に對し、直接間接に盡瘁せし所甚大なるものがある。なほ昭和十五年四月大陸科新設に當り、全卒業生より八千圓

上農寮に於ける塾風教育

を醸金寄附す。

(7) 郷土出身の先輩 昭和十六年八月伊澤樞密顧問官來寮し二時間に亘り詳細視察し深く感激し、揮毫の上、寮生に深刻なる訓辭を行ひ、強き人生觀を築かしむ。

尙ほ昭和十八年伊澤學校林二十四町歩を寄贈す。

昭和十六年十一月、鹽澤海軍大將は農村中堅人物鍊成の要務を痛感し、上農寮教育に期待を寄せ、講堂「清心寮」を寄贈し、落成式に臨場し懇篤なる訓辭を行ふ。

### 第三章 上農寮塾風教育の内容

#### 一、上農寮の組織

入學後第四學年迄に於て、農業科目を修得せる生徒は、第五學年に進級と同時に、各生徒の志望と、その家庭に於ける農業經營組織形態とを斟酌して各特色ある四ヶ農家に收容す。

上農寮の農家組織次の如くにして、農家名は昭和十一年十月四日上農寮舎落成式に臨場せる近藤長野縣知事が、各農家に揮毫せる藤田東湖「正氣ノ歌」の掛軸に因み命名せるものである。

天地正大氣粹然鐘神州  
皇風洽六合明德伴太陽  
忠誠尊皇室孝敬事天神  
死爲忠義鬼極天護皇基

農家	特色	家員	農場面積	家畜數
正大家	稻作ヲ基幹トシ普通作ニ重キヲ置ク組織	主任教師 一名 生徒 十三名	水田 九、〇 作物圃 三、六 蔬菜園 四、三 果樹園 三、三 計 一三、三	役牛 二 山羊 一 鶏 七 兎 〇
明德家	稻作を基幹トシ果樹ニ重キヲ置ク組織	主任教師 一名 生徒 十三名	水田 七、〇 作物圃 一、三 蔬菜園 一、二 果樹園 一、二 計 一〇、七	役牛 一 鶏 七 兎 〇

上農寮に於ける塾風教育

誠敬家	稲作ヲ基幹トシ養蠶ニ重キヲ置ク組織	主任教師 一名 生徒 十三名	水田 八〇〇 作物園 一〇〇 蔬菜園 八〇 果樹園 四〇 桑園 二〇 計 一二二	役牛 一 緋羊 二 鶏 七 兎 一〇
極天家	稲作ヲ基幹トシ養畜ニ重キヲ置ク組織	主任教師 一名 生徒 十三名	水田 七、五 作物園 三、二 蔬菜園 五、五 果樹園 五、五 計 一一七	役馬 一 豚 二 山羊 二 緋羊 二 鶏 二 兎 〇 蜜蜂 四

各農家の組織は日本農業の根幹である稲作を基幹とし、これに各々特徴ある經營要素を按配せる多角形經營組織である。

各農家毎に別棟の宿舍を建築して、炊事風呂等に至る迄一切の生活を農家單位に行ひ、崇高なる農家々風を醸成せしむ。

附屬農舎及び農場も亦農家別に配當し、宿舍並に經營實習を通じて、家族的團欒の裡に修鍊を行

ふ。

一學級の生徒を四ヶ農家に分け、各農家の人員を十三名とせしは、生徒訓育上並に農業經營の諸點より考慮せし結果にして、本教育の核心的施設である。

(イ) 一人の主任教師が眞に魂を打込んで訓育に當り、悉くの生徒を訓化するに適當なる人員は大凡十三名なること。

(ロ) 生徒をして合宿所的の散漫なる空氣を醸成せしめずして、家族的に敬愛醇厚の精神的生活を営ましむるに適當なる人員は大凡十三名なること。

(ハ) 四ヶ農家の設定は、各農家相互に勵み合ひ、競ひ合ひて躍進し、修養に經營に沈滞空氣を生ぜしめず、新興氣分を横溢せしめ得ること。

(ニ) 十三名を以て一農家を構成し、大凡一町三段歩の耕地を配當せば、概して本縣一般農家の經營規模に合致せしめ得ること。

(ホ) 水田中心農家、果樹園中心農家、養蠶中心農家、養畜中心農家の各々が地方の標準となり地方一般に活模範を示し經營の改善に資せしめ得ること。

## 二、鍊 成

(一) 鍊成の方針 上農寮の鍊成方針は皇國農民としての人格陶冶の徹底を期するために、無力なる「言葉を通せる口の訓育」を排し、生活行事作業等の「行」を通し「師弟魂の接觸せる塾風訓練」を施すにあり。

則ち第五學年生徒全員を一ケ年間に上農寮の四ヶ農家に收容し、各農家一町三反の農場を設定し、一名の教師と十三名の生徒とを以て組織し、教師の「眞の親心に基く愛の力」と生徒の「絶対信頼の子心」と渾然融合一體となり、崇高なる精神的空氣の下に日々苦樂を領つ共同生活を営みつゝ起居寢食勞働行事祭祀等の「塾式修行」を通して、切磋砥礪以て皇國農民として臣道を實踐し農業報國の信念に生くべき人材の鍊成を期す。

(2) 環境 上農寮所在地たる「中ノ原」は、東南に廣濶たる伊那谷、天龍の清流を俯瞰し、遙か東駒ヶ岳、仙丈岳に相對し、背後には鬱蒼たる松林地帯を負ひ、遠く西駒ヶ岳の靈峯を望み、眞に雄大宏壯にして森嚴の境域である。

「中ノ原神社」は構内の森林中に祀り、生徒崇敬の中心として、上農寮精神教育の基調をなすものである。

朝夕の行事は神社前に全員整列し、嚴肅に行はる。

自然の精は直ちに青年の心中に入る。

洵に崇高なる人格は、かくの如き雄大にして清淨なる大自然の下に於て、最もよく育まれ得るものなるを信す。

### (3) 行 事

早朝の行事(中ノ原神社前)

整列、點呼、敬禮

國旗掲揚、宮城遙拜、君が代齊唱、神社禮拜、勅語奉讀、奉答歌、綱領朗誦、訓話、體操、草刈

朝食の行事(各農家の食堂)

寮訓朗讀、食前の詞、食後の詞

上農寮に於ける塾風教育

夜の行事（中ノ原神社前）

整列、點呼、敬禮

宮城遙拜、神社禮拜、御製朗詠、訓話

行事一切は各農家の禮拜當番がこれに當る。

清澄な明け行く大空の下に眞に、神に通ふ嚴肅さで行はれる。

早朝行事後の體操は潑刺たる元氣そのものにして、嶺峯に昇る旭日を仰いで清快の氣が横溢する。時に銃劍術を行ひて敢闘の精神を鍊成し、或は駢足を一里の遠きに行ひ行軍力を増強する。

體操後の草刈には附近の原野或は林間に、清澄なる早朝の大氣の中を遠く駢足を以て實施し、自給肥料の造成に努め、各農家家畜の飼料とする。

(4) 上農寮綱領 綱領は日夜修練に精勵する上農寮生の根本的信念である。之を毎朝神前に朗誦して毎日の決意を新たにす。

上農寮綱領

吾等上農寮生ハ、聖恩ノ優渥ナルニ感佩シ至誠一貫日夜心魂ヲ磨キ忠良ナル皇國民人格ヲ鍊成シ

誓ツテ神國ノ幹トナリ 聖旨ニ應ヘ奉ランコトヲ期ス

(5) 寮訓 寮訓は上農寮教育上、特に日常力を須ひて修鍊すべき「鍊成目標」にして、洵に上農寮教育の基調を成すものなれば、寮生をして毎日朝食前朗讀せしめ之が實踐を誓ひ、躬行に邁進せしむ。

寮訓

- 一、教育勅語ノ 聖旨ヲ奉體シ居常之ガ皇遵ニカメ皇國忠良ノ臣民タランコトヲ期セヨ
- 一、農ハ國本タル所以ヲ堅ク意識シ農業報國ノ信念ヲ確立セヨ
- 一、明朗ニシテ質實ナル寮風ヲ作興シ高潔ニシテ和樂ノ生活ヲ期セヨ
- 一、常ニ正道ヲ直進シ俯仰天地ニ恥ヅルコト勿レ
- 一、謙讓ニシテ禮節ヲ重ンジ風格ヲ高メヨ
- 一、互ニ人格ヲ尊敬シ眞ノ愛ヲ以テ交友セヨ
- 一、利己心ヲ滅却シ獻身奉仕ノ精神ヲ發揚セヨ
- 一、至誠天ニ通ズ至誠ニシテ動カザルモノナキヲ確信セヨ

上農寮に於ける塾風教育



(6) 食作法 喫食は上農寮生活に於ける嚴肅なる行事である。

凡そ食事は天地の恩恵に依ることは勿論なれども、只管 皇恩の鴻大なるによる。

食前食後の詞を誦して御恩を感謝すると共に、臣民の道を完うせんことを誓ふのである。

食前ノ詞——御恩ヲ感謝シ皇運扶翼ノ爲ニ此ノ食ヲ戴キマス 戴キマス

食後ノ詞——此ノ力ニヨリテ愈々臣民ノ道ニイソシミマス 戴キマシタ

(7) 教師の宿泊 訓育の第一義は師弟人格の接觸にある。

教師の裸の接觸は實に徹底した精神教育の効果を擧げ得るものであり、主任教師の言動は直ちにその屬する農家の生徒の上に及び、延いては各家風の特質に現れ、その影響するところ、洵に甚大である。

學校長——毎週一回來寮宿泊し、行事の外に生徒全員を講堂に集め精神訓話を行ひ、尙生徒個々に面接して懇話す。

上農寮主任教師——構内主任住宅に家族全員と共に居住し、毎日各農家に宿泊す。

各農家主任教師——毎日各所屬農家に宿泊す。土曜日の夜は交互に自宅に歸り、日曜日朝登校す。

(8) その他訓育上の事項 毎週二回、學校長及び主任教師により次の講義が行はれ皇國農民精神の磨礪を期し、尙ほ時々講堂に於て靜坐を行ひ精神修練に資す。

月曜日夜 二宮夜話、論語

木曜日朝 弘道館記述義

又坐禪の大家を招聘し禪の講習を行ひ、精神の鍛鍊を期し、或ひは名士の來寮講話を請ひ、且つ座談會を催し、生徒をして腹藏なく率直に自己の意見感話を吐露せしめ、名士の風格に接せしめんことに力めてゐる。

(9) 日課

登校		日(月、水、金)		在寮		日(火、木、土)	
事項	時刻	自時	至刻	事項	時刻	自時	至刻
起 早朝行事 習		四、三〇	五、三〇	起 早朝行事 習		四、三〇	五、三〇
默		五、三〇	六、〇〇	實		五、三〇	六、〇〇

朝食	六、〇〇								
登校	六、四五								
授業	七、四五								
歸寮	一六、〇〇								
黙習又ハ實習	一六、三〇								
夕食	一七、三〇								
黙習	一八、三〇								
夜事	二〇、三〇								
就床	二一、〇〇								
朝食	六、〇〇								
學科	七、〇〇								
實習	九、〇〇								
晝食	一二、〇〇								
實習	一三、三〇								
夕食	一八、〇〇								
黙習	一九、〇〇								
夜事	二〇、三〇								
就床	二一、〇〇								

起床合圖の太鼓にて、各農家一齊に勇躍床を蹴つて起き、洗面後直ちに「光榮ノ日」の誓詞により各自 宮城を遙拜し奉り、農家主任に朝の挨拶をなし、冷水摩擦を行ひ、各農家奉祀の神棚に禮拜し、次に各自の分擔に隨ひ掃除、家畜飼養を行ふ。

次の合圖により神社前に至り、嚴肅なる神前行事を行ふ。

冬季の起床時刻は午前五時とし、夏季は在寮日に限り晝食後黙習又は午睡を行ふ。

在寮日にして雨天の際は講堂に於て補充授業を課す。

夜の黙習には教師も生徒と机をならべ眞に自覺ある靜肅なる學習が續けられ、聊も靜肅な勉強を亂す者はない。

就床は二十一時にして、消燈後は一人として聲を發する者なく、直ちに安眠に入るを上農寮の崇高なる姿とす。

炊事當番は全員の生命の糧を一週間あづかるもので、全員より三十分早く起床して炊事に當り、晝食、夕食は各農家の作業終了時を見計ひ、全員に温き食事をとらしめんことを心掛け、間引菜、屑菜を整理して漬物を作り、殘滓の利用等一切に氣を配り眞剣なる努力が拂はれる。

従つて炊事當番一週間に受くる修練は、他に容易に見るを得ざる眞剣深刻なるものにして、宿泊訓練上最も重要なものである。

### 三、學 修

#### (一) 學科授業

上農寮に於ける塾風教育

(昭和十八年) 授業時間表

曜日	場所	第一時	第二時	第三時	第四時	第五時	第六時	第七時
月	本校	修身	公民	地理	修練	〇	〇	〇
火	上農寮	拓植	支那文	〇	〇	〇	〇	〇
水	本校	研修	三角	公民	幾何	歴史	體操	教練
木	上農寮	國語	總農說	國語	〇	〇	〇	〇
金	本校	幾何	農法規	武道	農簿記	教練	教練	修練
土	上農寮	國語	農經濟	〇	〇	〇	〇	〇

○ハ實習ニシテ、實習ハ夕刻迄行フ。雨天ノ際ハ豫メ定メタル授業ヲナス。

月・水・金は登校日と稱し、本校に登校せしめて學科授業を課し、月曜日は午前中授業午後歸寮して實習、水・金は午後四時歸寮實習又は黙習を行ふ。

火・木・土は寮の講堂に於て早朝二乃至三時間學科授業の後、夕刻迄實習を行ひ、農閑期の雨天

の際は講堂に於て學科授業を課す。

土曜日の夜は當番生徒又は遠隔地の生徒以外の者は歸宅し、日曜日朝登校す。

(2) 課外授業 水曜日及び金曜日の夜間には、國語、數學の擔任教諭は來寮宿泊して各二時間の課外教授を、希望者に對し行ふ。

(3) 黙習時間 登校日の早朝三〇分及び毎日午後六時半より八時半まで二時間、主任教師と共に机を並べ真剣なる黙習が行はれる。尙ほ就床時間後黙習するものは、講堂及び食堂に於て行ふ。従つて自宅通學時代に比し勉強時間も多く、精神の集注せる勉強が競争的に行はれるため、學業成績著しく上進し、讀書の良習慣深く養成せらる。

四、實習

(1) 農場の組織 昭和十八年度の組織次の如し。

家名	面積	畜數
正大家	水田 九〇反、 果樹園 〇、三反、 蔬菜園 〇、四反、 桑園 三、六反、 作物園 一、三反、 計 二	役牛 一、 馬 一、 豚 一、 山羊 一、 綿羊 一、 鶏 七、 兔 一、 蜜蜂 一〇

上農寮に於ける塾風教育

明徳家	七、〇	一、二	一、二	一、三	一〇、七	一	七	一〇
誠敬家	八、〇	〇、四	〇、八	一、〇	三、三	一	二	一〇
極天家	七、五	〇、五	〇、五	三、三	二、七	一	二	五
計	三、五	二、四	二、九	二、〇	九、一	四	四	三、五

(2) 實習方法 各農家に屬する生徒は、第四學年までに修得せる知識技能に基き、入寮直後主任教師の意見を聴き、各農家の家長を中心として研究熟議の上、農業經營方針の大綱を樹立し、更に作付設計、飼養設計等を決定す。

毎日々食後、各農家毎に翌日の作業豫定を協議し、更に當日の實施事項を記帳し整理す。主任教師は生徒と一體となり、汗を絞りにて労働に従事し、實習を通して無言の間に活きた訓育が行はれる。

生徒は眞に自家を經營する心構へを以て、自發的に作業に従事し、單に作物家畜の栽培管理に止らず、畜舎修理、屋根葺き、農具修理等一切の作業に當り、以て農家經營の實體に觸れしむ。

(3) 實習の特色 上農寮の實習は、一般農業學校の農場實習とその軌を異にし、次の如き特色

を有す。

(イ) 自發的實習なること。一般の實習は教師に命ぜられ、教導せらるゝ實習にして他動的である。然るに上農寮實習は、自家經營を躬ら行はんとする自發的實習である。従つて、生徒の實習態度が自治的、積極的であつて、勇躍して之に當る潑刺たるものである。

(ロ) 創造的實習なること。一般の實習は教師が教授し生徒は之に従つて練習する所謂「教へられる實習」である。教師は教授せし事柄を生徒が體得するものと信ずるも、事實は教へしことの何分の一かを體得するに過ぎぬ。

然るに上農寮實習は、各農家生徒が家長を中心とし、既得の知識技術を基礎として、或は篤農家に質し、或は専門教師に尋ね、或は書籍を涉獵し、或は地方の實際を視察する等、あらゆる苦心努力を拂ひ、研究し工夫し創造して實施す。

従つて上農寮の實習こそは眞に身につく、體得せらるゝ實習にして、茲に強き自信と迫力を生ず。

(ハ) 総合的實習なること。一般の實習は、各専門教師より斷片的技術を教授せらるゝものにし

て、即ち作業擔任教師は作物栽培のみを、畜産擔任教師は畜産のみの技術を指導するを例とす。然るに上農寮實習は、水稻も蔬菜畜産も一切を総合せる「經營實習」により「農業經營の實態」を把握するを得せしむ。

(二) 實物大實習なること。一般の實習は一反歩の水田に十數人若くは數十人の生徒が入りて、所謂「箱庭式農場」に「模倣の農業」「型の農業」が行はるゝものであるが。故に、農に關する「物識り」とはなり得るも、眞の農業經營の「迫力」を練り上げることは困難である。

しかるに上農寮に於ける實習の一例を舉ぐれば水田の代掻に一人か二人の生徒が牛を御して廣き水田に一日を過す等實際の農業が行はれ、之により「雄渾なる精神氣魄」を養成するを得。

(ホ) 晝夜を分たざる實習なること。一般の實習は、晝間一定時間の實習なるも、上農寮實習は宿泊による晝夜を分たざる實習である。

則ち夏季起床後直に草刈を行ふことあり、午後八時頃迄水田代掻や田植に勇躍して奮闘することあり、或は夕食後に水稻調製にいそしみ、或は夜半の驟雨に農庭の麥を收納することがある。惟ふに農民精神、農業愛好心たるや、一片の訓話や技術實習により、決して之を涵養し得

るものにあらず、眞に深くこれを養ふには時に未明に起き、星を戴きて朝草を刈るの快味を味はせねばならぬ。

又時に一日の勞働に疲れながらも、月光を負ひ冷雪を浴びつゝ寮舎に歸る途上の快味を體得せしめねばならぬ。

## 五、保 健

上農寮の位置は、高燥なる高原地帯にして、紫外線に富み、清淨なる空氣と冷清なる水とを有し、寮舎は林間に建設せられ、眞に得難き絶好の健康地帯である。

入寮以來規律ある生活と、間食の杜絶により、各自の健康は頗る増進し、前年迄虛弱なる體軀も著しく強健となり、創設以來九ヶ年間醫師の來診を求めしこと絶無である。

身體検査の結果に於て、退寮期には入寮時に比し、體重が平均四斤の増加を示し、胸圍の増加すること更に著しきものがある。

(一) 食 事 炊事は各農家毎に炊事當番が一週間交替にて行ふ。獻立表は炊事主任教師指導の

下に炊事経費の節約を旨とし、栄養上遺憾なからしめんことを期し、慎重研究の上作製す。尙之を以て地方食、生活改善に資す。

又代用食の日常化の見地より製麵麩施設を設置し、毎週一回上農寮生産の小麥粉を以て製麵麩し、節米に食生活の簡易化に、又生徒の製麵麩技術の錬磨に裨益する所甚大である。

(2) 生活費 生徒の一ヶ年間の食費は現物を以て之に充て、各人の負擔は次の如し。尙昭和十一年六月十五日長野縣令第二十六號を以て、特に「上農寮農場實習ニ限り、豫メ知事ノ認可ヲ得テ其ノ生産物ノ一部ヲ生徒ニ給與スルコトヲ得」の旨公布せられしを以て、生徒の食費負擔は將來大いに輕減せられる見込である。

玄米三俵、麥二斗、味噌六貫、醬油五升、漬物五升樽一樽、砂糖五百匁、食鹽三升、薪十束。

(3) 體育 早朝行事の際、日本體操、ラジオ體操等を實施し、以て實習による身體鍛鍊を補ひ、身體各部の均齊なる發育を期す。

早朝清澄なる空氣の中を一里の長きに亘り、駢足を行ふことあり、裂帛の氣合を以て銃劍術を實施する事もある。何時にても全員或は一人にても運動し得るやうに鐵棒・相撲土俵等を設備す。

### 六、主任教師

塾風教育の根基は主任教師の人格にあり。上農寮創設に當り「主任教師は必ずしも一世に卓越せる識見高き人材を要せず、十三名の生徒を眞に吾子の如く熱愛し、薰化玉成せざんばやまざる「母心」を持つ表裏なき至誠獻身の精神に徹する人物を求め得れば足らん。」との確信を以て、主任教師の任用には全く學歷、學識、才幹等に捉はるることなく、只管斯る至誠一貫の人物を廣く天下に求めたるものである。

顧みて上農寮塾風教育の順調なる進展を致せし所以を懐ふに、一に懸つて如上の教師任用の方針を採りしに依ることを信ずるのである。

現在の主任教師の學歷、年齢、擔當科目は次の如くである。

擔任	學歷	年齢	擔當科目
上農寮主任	東京高等農林學校農學科卒業	三四歳	農業、經濟、耕種、實習

正 大 家 主 任	東京帝國大學文學部卒業	三七歳	國 語、 實 習
明 德 家 主 任	上伊那農業學校卒業(陸軍中尉)	三〇歳	教 練、 實 習
誠 敬 家 主 任	上伊那農業學校卒業	二八歳	耕 種、 實 習

七、學年短縮による新課程

昭和十八年四月學制改革により修業年限四ヶ年に短縮せられたため、次の如く課程を改正し、第三學年迄に農業學科目並に技術的實習を修得せしめ、第四學年に於ては生徒全員を一ヶ年間に農寮に收容し、綜合經營實習を課し、宿泊塾風教育を施す方針である。

なほ文部省も亦、第四學年に在りては綜合經營實習を課する方針であり、文部省がかかる方針を採られたのは、本邦農業教育制度の一大革新にして、眞に慶祝に堪へざると共に、快心の極である。

(イ) 學科課程

教 科	國 民 科											實 業 科			
	科 目	修 身	國 語	國 史	地 理	耕 種	養 畜・養 蠶	農 業 土 木	農 業 加 工	農 業 經 濟	林 業	拓 殖	農 業 總 說	外 國 語	實 習
第一學年	一	四	二	二	二	二							英(二)	三	
第二學年	一	四	二	一	三	二(一)							英(二)	五	
第三學年	二	三	一	一	三(一)	二	二	一	一	一				六	
第四學年	二	三	一	一	一	一	二	三(一)	二	一	一			八	

科目	第一學年				第二學年				第三學年				第四學年																	
	實	農	加	林	養	耕	科	目	實	農	加	林	養	耕	科	目	實	農	加	林	養	耕	科	目						
實驗	種子實驗 作物生育調查 氣象實驗	農具使用法	繩、草履、草鞋、 深庵漬、甘藷切干、 乾菜			大麥、小麥、大豆、 甘藷、南瓜、芋、 大根、蒟蒻、葱、 芥藍、馬鈴薯、 芥、綠肥作物	第一學年		水稻、陸稻、玉葱、 茄子、胡瓜、人參、 蕃茄、白菜、麻、 油菜、飼料作物、 桑	家兔、雞、豚、蜜 蜂、秋蠶	育苗	倭、籠、麻、木炭、 福神漬、桑纖維	農具使用法	農具使用法	作物生育調查 病蟲害實驗	第二學年		梨、苹果、葡萄	牛、馬、羊、春蠶	造林 材積測定	味噌、醬油、麵、 漆喰、乾果	測量、製圖、 機械農具使用、 修繕	育種實驗 土壤、肥料實驗 農產物審査	第三學年						第四學年

(口) 實習課程

每週教授總時數	修	合	藝	體			理		
				武	體	教	生	物	數
三六	三	三	二	二	三	一	二	二	二
四〇	三	三	二	二	三	二	三	三	三
四〇	三	三	二	二	三	二	三	三	三
三七	三	三	二	二	三	二	三	三	五
三七	三	三	二	二	三	二	三	三	四
三七	三	三	二	二	三	二	三	三	四
三七	三	三	二	二	三	二	三	三	五



農業經營	農業調査	農業調査	農業調査	○普通作=重キヲ置ケル經營
農業經營	農業調査	農業調査	農業調査	○園藝=重キヲ置ケル經營
農業經營	農業調査	農業調査	農業調査	○養蠶=重キヲ置ケル經營
農業經營	農業調査	農業調査	農業調査	○養畜=重キヲ置ケル經營

### 第四章 上農寮塾風教育の實績

上農寮教育創始以來、茲に第九年の秋を迎へ「中ノ原」原頭、金風颯々たる寮舎に寮生は歡喜と希望に充ちた生活をいそしんでゐる。この間、學校長を中心とせる全校教職員の精神的協力と、主任教師の獻身的努力とは、生徒の眞の自覺に基く積極的修練と相俟つて克く本教育の眞髓を發揮し、豫期に優れる躍進を遂げ、今や「宿泊訓練と綜合教育を根柢とせる上農寮式塾風教育にあらざれば徹底せる教育は至難なること」を確信するに至つた。

茲に、その教育成績として、特に顯著なる事項を擧ぐれば左の如し。

#### 一、皇國精神の砥礪

宏壯雄大にして、森嚴清淨なる境域に於て 宮城遙拜、神社禮拜、君が代齊唱、勅語奉讀、奉答歌、御製朗詠、精神訓話等の行事が毎日朝夕、嚴肅に舉行せられ、更に起居、寢食、勞作の間に於て、學校長並に主任教師より、皇國精神の砥礪に渾身の力を傾倒せる教育が絶えず行はれる。

かくて一ケ年に亘る、間斷なき「行の教育」の徹底は、個人主義觀念を矯め、皇國臣民として、農業報國の信念に生くべき烈々たる至誠盡忠の精神として、結晶しつゝあり。

#### 二、農業愛好心の涵養

上農寮に於ては、四ヶ農家に分れ、各農家毎に特色ある經營組織の下に合理的綜合經營を行ひ、過去四ヶ年間に修得せる技術を根柢とし、更に研究を重ね工夫を凝し、「最も卓越せる成果を收めむ」とする氣魄の下に協力し、精魂を傾注す。茲に於て、各自無限の快味を感得し、欣々乎として農業に従事するに至る。

生徒の語るところに依れば、(昨年迄は午後四時頃になれば「早く實習が終ればよいが」と思ふことと往々ありしが、上農寮に入つてより「成るべく日の暮れるのが遅ければ良いのに」と希ふ心持になつた)と。

實に、田植時期と收穫期等に於ては、午後八時頃迄、孜孜として田圃の作業に精勵すること尠からず。黄昏、一日の業を了へ、月光を踏んで寮舎に歸る途上の快味は、一般農業學校にては全く味ひ得ない所であつて、而もこれこそ農民精神磨礪の眞髓でもある。

### 三、師弟人格接觸の徹底

昭和十一年、上農寮舎建築に當り、第五學年生徒人員の關係上、取敢へず三ヶ農家を新築したが、各農家共に、主任教師居室として六疊一室を、生徒居室として十疊二室を設け、各室は襖を以て境せしめた。蓋し同一建物内に起居寢室を共にするといへども、師弟の居室には襖を以て境するを實際生活上適當なりと認めしが故である。

然るに昭和十二年春、第五學年生徒増員のため、「第四農家」の増設にあたり、第四農家十名の生

徒は、その新築落成迄の三ヶ月間を講堂に起居せしめたが、講堂は襖なき大廣間なるを以て、師弟の間、寸分の境を作る能はざらしめ、眞に師弟赤裸々の接觸せる生活訓練を行ふの餘儀なきに至らしめた。

而して七月新築農家に移轉するや、他の三農家に比較して著しく明朗にして崇高なる家風の醸成せられしを認められた。

蓋し襖ある寮舎にては師弟若干の心の隔を免れないが、襖なき講堂に於ては生徒は教師に對し、自己を修飾し、自己を隠さんとする氣持を捨て、自己の一切を丸裸にして教師に接觸するが故に徹底的修行の決意を築き、従つて心氣自ら明朗となつたものなりと思はる。

仍て昭和十三年度には、各農家共に襖を撤廢し、教師も生徒と共に机を並べて讀書し、床を並べて臥寢し、師弟間に聊の「隠し隔て無き」生活訓練の行はるゝに至り、師弟渾然融合一體となり、崇高にして明朗なる家風の作興を見るに至つた。

腹藏なく謂へば、昭和十三年度の寮生は必ずしも素質優秀なる學級ではなかつたが、襖を撤廢せる新施設により、級風一變し、身を以て下級生に垂範せるため、下級生より敬慕せらるること、こ

の學級の如く深厚なるはいまだ嘗て見ざる所であつた。念ふに表面を飾り外觀を整ふことは容易の業なるも、日常接觸する下級生より、心から敬慕せらるゝは、眞にいつはりなき人格の力に依てのみ可能である。而して襖なき師弟一體の精神的生活の力は、遂に克くこの域にまで達するを得たのである。

#### 四、個性教育の徹底

教室若しくは農場に於ては、生徒の眞の個性を掴むことは困難であるが、宿泊に依り生活と起居寢食を共にすることにより、始めて、眞に個性に迄徹し生徒を知悉することが可能である。

教室内に於て、成績優等なる溫良生徒にして、入寮宿泊するや案外に利己的なるあり、不親切なるあり、教室内に於て稍々散漫にして、成績劣等の生徒にして宿泊訓練に入るや、眞に純情にして眞面目なる長所を持つものがある。

實に教室内に於て教師の眼に映ずる生徒は、その「眞姿」にあらず、「生徒の眞姿」は宿泊により起居寢食作業を共にするにあらざれば判明せず。

上農寮主任教師は、各農家十三名の生徒の眞姿に觸れ「一人として缺點のみの生徒は無く、又一點の短所なき生徒もない、従つて教室に於ては首席より末席迄の席次を附するが、宿泊教育に於ては全く順位を附する能はず」と。かく宿泊訓練により、各人の長所と短所とを明確に知悉し、その長所を益々伸暢せしめ、その短所を極力矯正し、以て人格の玉成に力を效すこそ、塾風教育の特色である。

#### 五、主任教師の人格發揮

塾風教育の根柢は主任教師の人格に在ることは謂ふ迄もない。

一般の學校に於ては、學歷の優れる教師、資格の高き教師、才智ある教師、辯舌爽かなる教師等は光彩を放ち敬意を拂はるゝを例とすれども、上農寮の主任教師として生徒と起居寢食労働を共にするや、一切の資格や學歷や才智は隠れ、唯々表裏なき丸裸の人格のみが、光輝を放つのみである。世人往々にして謂ふ「塾風教育の主任教師は人格識見一世に卓越せざるべからず」と。然るに上農寮九ヶ年の經驗よりせば、必ずしも稀有の卓越せる人物を要するものにあらず、至誠一貫、十

三名の生徒を眞に我が子の如く愛し生かし、立派に玉成せんとする熾烈なる熱意を持つ教師ならば、必ずやその任に堪へ得べきを信ず。

而もこの熾烈なる熱意と誠意とを具有する教師は世上絶無にはあらざるを思ふ。

現在上農寮の各農家主任四名は、年齢、資格、學歷、學識、才能等に著しき差異ありと雖も、生徒各自は何れも己が農家主任教師を絶対崇敬して息まざるのがその眞相である。けだし世の母親が必ずしも悉く優秀人物にあらざるに拘らず、我子よりは絶対に敬慕せらるゝ所以は、我が子に對する愛の力の強烈なる他の企及し能はざる所なるが故である。

従つて塾風教育主任教師にはこの崇高なる母性愛と同じ熱愛を持つ教師を要するのみである。

寔に上農寮塾風教育の根本精神は、この母親の持つ「母心」と同じ熱愛を持つ教師の「至誠」に外ならぬ。則ち四月三日入寮式に於て學校長より預かりし十三名の生徒を「至誠而不動者未之有也」の信念を以て、如何に苦勞するも斷じて立派に鍊り上げ、一ケ年間に一人残らず「薰化玉成せずんば息まず」と謂ふ強烈にして崇高無比なる「母心」の發揮こそこの教育の根基である。

## 六、學習と就眠

上農寮生活に於ては、毎夜二時間の黙習時間を設けてゐるのであるが、その間、教師も生徒も机を並べ精神を集注して自習し、微音だも發するものがない。

従つて生活は「自宅にあつた時よりも遙かに勉強が出來得る」と謂ひ、學業成績も亦第四學年に比し著しく上進した。

更に寮生活に於て、消燈後苟くも雑談に耽り寢付不良なれば、怖るべき弊害を醸成し、却つて、生徒の品性を傷け、宿泊訓練の價値を根柢より覆すに至るであらう。

上農寮教育創設に當り、特にこの點に深く意を須ひたるため、寮風高潔にして明朗、消燈時刻を報ずるや、直ちに水を打つた如き静けさに入る。これこそ本教育の大なる誇りであり特色である。

學習と謂ひ就眠と謂ひ、同級生が相集り、各自自重し自制しあひつゝ、一點の弊害なく靜肅に行はるゝは、上農寮教育の崇高なる姿である。

### 七、指導能力錬成

卒業後自家に歸り唯黙々として牛馬の如く働くのみにては、必ずしも農業學校の卒業を必要としない。

自家の農業經營に精進すると共に、部落や村の中堅人物となり先頭に立ちて村を振起し、亦入營後は中堅幹部として部下を指揮する氣力をも養成しなければならぬ。この點に鑑み上農寮では各農家附屬の指導農場に於て、又は下級生の宿泊訓練に於て、寮生を小隊長又は分隊長として實の他一切の指揮をなさしめ指導力を錬成せしめてゐる。

### 八、行軍力の錬磨

上農寮より本校に登校する月・水・金曜日には一小隊を編成し、凡そ三軒の途を徒歩にて通學す。この間草鞋履に巻脚絆を着用し、喇叭を吹奏し、又時に馳足を行ふことあり、特別の時間を設けずして、教練科に最も重要な規律ある行軍力を錬磨することを得る。

### 九、開墾

昭和十一年以來、上農寮附屬の水田畑地の設定のため、原野の開墾に着手し、昭和十五年四月には上農寮所在地南箕輪村は大陸科新設の主旨に多大の賛意を表し、村有林十町歩の廣大な土地を寄

#### 上農寮開設後開墾状況

年次	原野ヲ水田ニ開墾	原野ヲ畑地ニ開墾	計
昭和十一年	一六	二五	四一
昭和十二年	七	五	一二
昭和十三年	八	二	一〇
昭和十四年	一〇	二	一二
昭和十五年	一	八	九
昭和十六年	一	七	八
昭和十七年	一	〇	一
昭和十八年	一	〇	一
合計	三六	一六四	二〇〇

附するあり。爾來上農寮生徒を中心に開墾の聖歎を奮ひ心魂を傾注し、前表の如き成績を挙げた。凡そ開墾は食糧増産の精華にして、最も雄渾にして男性的なる作業である。寮生は大陸農場或は報國農場の開墾に常に全校生徒に卒先し、流汗淋漓、裸體の全身は土にまみれて奮闘し、洵に崇高なるものがある。

### 一〇、父兄の感謝

上農寮教育は、生徒全員を一ヶ年間繼續して宿泊せしむる制度なる故、生徒は朝夕家業の手傳をなし得ない。

それ故創設に先立ち父兄會を開催し説明せしところ、父兄全員は上農寮教育創設の趣旨に深く賛意を表し、「この劃期的教育革新に對し、子弟の朝夕の手傳の如きは何等顧慮を要せず、吾等自身が一時間宛早起して働けば事足りる。」との理解ある答を得た。

その後、毎年入寮後二ヶ月を経て、家庭訪問を行ひ生徒の状況を質すに、毎週土曜日に歸宅する生徒の人物は、その度毎に向上する旨を述べ、父兄より感謝の辭をいたる處にて耳にするを得た。

更に毎年十月開催の父兄會には、我が子弟の訓練の姿と農場經營の實況を目撃し、「卒業後は直ちに自家農業經營の全體を安心して委せむ。」と語る父兄尠からず。

### 一一、卒業生の動向

上農寮卒業生の大部分は郷村に歸り、黙々として農業經營の改善に渾身の力を致し無言の教訓を郷土に垂れつゝあり。

父兄は上農寮教育を受けたる己が子弟を絶対に信頼し、卒業後は直ちに一家の農業經營を擧げて、これに委せるを例としてゐる。

その一、二を擧ぐれば、下伊那郡大下條村出身にして昭和十三年三月卒業せる某君の如き、卒業後歸村するや、同夜直ちに父より農業經營の一切を委ねられ、上農鍊磨の腕を振ひ次の如き農業組織を採り勇躍して經營に當つた。

水田 五反歩。 桑園 一町歩。 雞 八十羽。 山羊 三頭。

同君の經營に對する自信と、活きた學術と、雄渾なる氣魄は美事な苗代となり、鬱蒼たる桑園と

なり村民を驚かせた。

父は村長の要職にあり、聖戦下の村治に忙殺せらるゝのみならず、夏季移民計畫遂行のため滿洲國に出張し、自家を顧みるの暇無き状態であつたが同君は母と共にその留守を護り、雇人を使役して熱心に經營を進めた。同地方一般に桑園反當り收繭量二十五貫内外に過ぎず、水田は當年この地方一帯に稻熱病猖獗を極め、いづれも二、三割減收を免れなかつたが、君は次の如き成績をあげて村民を啞然たらしめた。

桑園一町歩	上繭收量	三九五貫（反當四〇貫）
水田五反歩	玄米收量	四八貫（反當一〇貫）

毎年の卒業生が秋末には、農業經營又は農村生活に就き歡喜に漲る報告をなすを例とするが、昭和十五年卒業の某君は秋末を待たずして、初夏學校長を訪ね欣快極まりなき次の報告をなした。同君は卒業直後に、父より水田一町二反、桑園一町二反、畑地三反の廣大なる農業經營を擧げて委ねらる。

先づ苗代に精魂を傾けしが、上農寮時代に苗代に腐敗病を生じ、眞劍なる研究努力の結果漸く恢復せしめし體驗を有するを以て、この經驗に基き附近農家の苗代より遙に卓越せる成績を擧ぐるを得た。

偶々理窟好きの傲慢なる年長青年が苗代に腐敗病を生じ、農會技術員の指導を受けし處、「この苗代は見込なき故追播せよ」と宣告せられ大いに落膽し、更に同君の判定を求めしに、「大丈夫恢復する故、追播の要なし」と斷言す。蓋し昨年の上農寮苗代と同様の病狀なりし故斯く確信を以て答へたものである。

そして直ちに手傳つて排水溝を掘り、ボルドー液を撒布し、特に冷水を避け毎朝夕灌水の加減を指導せし處、數日にして著しく恢復し立派な苗代となりし故、右の青年は眞に驚き心より敬服するに至り、爾來村内農家は交々農事質問に來宅するに至り、之が應答上必要に迫られ既に農業専門書籍購入すること六冊に及ぶ。

尙ほ青年會も往時は理論鬭争を事とせしが、最近農業研究に深き興味を持ち、就中同君の研究結果を聽くを楽しみとするに至つた。

洵に「卒業後三ヶ月にして、既に村内農業指導の權威として敬意を拂はれ」勇躍し歡喜の農村生

活を営みつゝある。これぞ、卒業生が眞に「大地に足をつける」證左にあらずや。

### 一二、入學志願者の増加

昭和十年上農寮創設以來、堅實なる皇國農民の鍊成を目標とする上農寮熟風教育の眞髓が、漸く

生徒累年狀況

年次	入學志願者數	在學生徒數	寄宿舎生數	上農寮生數
昭和十年	一一八	三三〇	四七	二四
昭和十一年	一一二	三四七	五二	三一
昭和十二年	一五八	三七二	六七	三八
昭和十三年	一六四	三八二	八九	二九
昭和十四年	二一〇	四〇九	九五	四四
昭和十五年	二六六	四七七	九〇	四七
昭和十六年	二八〇	五四二	九三	五一
昭和十七年	二五〇	五九九	一一〇	四九
昭和十八年	二八三	六五七	一一二	五三

世人の注目する所となり、入學志願者年毎に激増し、殊に遠く他郡よりの志願者著しく増加し、従つて寄宿舎生の増加を見たるは、全く斯教育の風を望んで來たりしものと云はねばならぬ。

### 第五章 大陸科の加設

今や大東亞戦争は苛烈悽愴なる決戰段階に入り、大陸農業開發による食糧の飛躍的増産と、大陸幾億農民の指導啓發とは、戦力増強上極めて重大なる喫緊の要務にして、これが第一線に挺身活躍すべき人材の養成こそ、眞に緊要なる教育なりと信ず。

念ふに上農寮熟風教育の精神たるや、一面内地農村中堅人物養成に適すると共に、一面大陸農業開發に挺身すべき人材の鍊成に好適せることを確信せるを以て、昭和十五年四月時局の趨勢を深く洞察し、第一部（初卒五ヶ年）學級増加を行ひ、一學級を募集し、第四學年までに基礎農學を修得せしめ、第五學年に於ては

内地科……内地農業志望者を以て組織す

上農寮に於ける熟風教育



大陸科……大東亞進出志望者を以て組織す

の二學級を編成し、俱に一ケ年間「上農寮」に收容し、塾風教育を基底とし各學級に對し夫々特色ある教授訓練を施し、一は内地農村中堅人物たらしむると共に、一は大東亞農業開發指導に當るべき人材たらしめんことを期す。

(1) 大陸科農場 興亞科加設に伴ひ、地元南箕輪村は興亞科農場として上農寮に隣接せる原野十町歩を寄附す。昭和十五年八反歩、昭和十六年一町七反歩、昭和十七年二町歩、昭和十八年五反歩の開墾をなし、玉蜀黍、大豆、甘藷、麥、蕎麥、稔、きく芋の作付をなす。

(2) 畜力用農機具の利用 文部省の配慮により陸軍省より軍馬一頭の貸付を受け、牛六頭と共に飼育し、昨春下附せられたる國庫補助金を以て、畜力用農機具たる開墾犁、馬鋤コンカルハロー、水田中耕除草機、カルチペーター、鎮壓器、自動選別脱穀機、畜力用精米機、製粉機等を購入し、生徒をして畜力用農機具の使用を習熟せしめ、肥料の自給を計り、食糧増産に寄與せしむると共に從來ガソリンを使用せし脱穀機、製粉機、精米機等を畜力に代へしめ國家の要請に添はんことを期してゐる。

(3) 寮舎の新築 學級増加により昭和十五年四月入學せし生徒は昭和十九年四月第五學年に進級するを以て、内地科は從來の上農寮に收容し大陸科は寮舎新築を要するが故に、昭和十七年十二月通常縣會に於て縣費豫算參萬圓を以て二ケ年繼續事業として寮舎並に附屬建物、主任住宅の建築を決定し、昭和十八年八月建築工事に着手し、十月十一日上棟式を舉行す。

上棟式には郡山長野縣知事態々來寮臨場せられ訓示を行ひ、各寮舎に對し藤田東湖「正氣歌」に因み命名す。

第一寮舎 神州家。 第二寮舎 千秋家。 第三寮舎 八州家。 第四寮舎 六合家。

## 第六章 上農寮の光榮

畏くも 天皇陛下には大東亞戰爭下に於ける國民總努力の様相を、特に銃後生産擴充に全力を傾注しつゝある民情を實視せしめらるゝ御思召を以て、昭和十七年五月より七月に亘り、全國九百ヶ所に侍従を御差遣遊ばさる。本縣下には戸田侍従を御差遣あらせられ、本校上農寮、御視察の光榮

上農寮に於ける塾風教育

を賜はる。

昭和十七年六月十六日、數日來の風雨全く霽れ満天に一點の雲なき好日和にして、全校生徒の歡喜眉宇の間に漲り、「中ノ原」原頭初夏の陽光と新緑に輝く。午後二時五十分御着車、學校長の案内にて御休憩所たる中ノ原神社前芝生上の「テント」内に着座せらる。永安知事侍立、學校長より上農寮の概要に就て御説明申し上げ、寮内御案内に移り、水田除草實習、各農家の構造、寮生の各農家前の作業、全校生徒の隊組織による開墾實習に挺身し流汗鍛錬する状況を御覽遊ばされ、豫定時間たる三十五分に達せしも更に御休憩所に入れ、廣壯雄大なる中ノ原々頭にて天龍の清流、仙丈、東駒の靈峯を眺望せられつゝ、上農寮塾風教育の組織、訓育、日課、行事、學修、實習、炊事、教師宿泊、卒業後の經營狀況等に關し詳細に御聴取になり、約一時間に亘る御視察の光榮を賜はる。御發車後全校職員生徒は、未だ會つてなき感激と光榮の中に、「中ノ原神社」前に於て侍從御差遣拜受記念式を擧ぐ。

初夏の夕陽燦として仙丈嶽頂に輝き、夏雲白く湧き上り、「中ノ原」原頭廣壯雄大にして森嚴清淨を極む。

栽植せる記念樹は永久に全校生徒をして、忠誠奉公の精神を振起せしむべく、感激に滿つる誓詞は長へに本校々風の根基をなさん。

更に全校生徒は毎月十六日を「光榮の日」と定め、特に行的鍛錬により盡忠精神を最高度に砥礪することを終生忘れざるべく、相率ひて忠誠奉公の皇國民資質を鍊成せんことを確信して疑はず。

### 誓詞

畏クモ一天萬乗ノ 大君ノ侍從御差遣ノ 聖恩ヲ忝クシ生等カ心血ヲ注キ農耕ニイソシム圃場ト  
日夜修行ニ精進スル寮舎ニ臨マレ親シク御視察ヲ賜ハリ生等ノ修鍊カ 天聽ニ達センコトヲ想フ  
時生來未タ會テ味ヒシコトナキ新ナル深キ感激ヲ覺エ感涙ノ滂沱タルヲ禁スル能ハス 聖恩ノ鴻  
大ナル眞ニ一生ヲ貫イテ忘ル能ハサル所ナリ

生等ハ千載一遇ノ無上ノ光榮ニ感泣スルト共ニ更ニ一大責任ヲ自覺シ本日ヨリ全ク更生ノ精神ヲ  
以テ修養ニ精進シ切磋琢磨眞ニ負荷ノ大任ヲ完クシ得ル皇國農民タルノ資質ヲ鍊成シ以テ無極ノ  
皇恩ニ應ヘ奉ランコトヲ期シ左ノ事項ヲ固ク宣誓ス

一、聖恩ノ忝キヲ感拜シ毎朝 皇居ヲ遙拜シ天壤無窮ノ 皇運ヲ扶翼シ奉ランコトヲ心底ニ誓フ

へし

- 一、校訓ヲ遵奉シ師長ノ命ヲ服膺シ崇高無比ナル校風樹立ニ邁進スヘシ
- 一、至誠天ニ通スルコトヲ確信シ全校一致正道ヲ直進スヘシ
- 一、互ニ人格ヲ尊敬シ恭謙修養ニ専念スヘシ
- 一、食糧増産ニ挺身シ農業報國ノ使命ヲ全クスヘシ

昭和十七年六月十六日

長野縣上伊那農業學校生徒一同

(附)

上農寮歌

- 一、銀雪聖き峻嶺に  
金光崇高く射すところ  
世の黎明に魁けて  
先づ照り初むる四つの城  
眼路涯もなき高臺の  
吾等が希望 上農寮

二、天照らしませ神の世の

神乍らなる農耕を

皇國の基に培ひて

正道直路を誤らず

俯仰天地に恥づるなき

吾等が理想 上農寮

三、山紫に水清き

中野原を宰ける

神の御前におろがみて

高く掲ぐる日の御旗

仰ぐ吾等が胸深き

至誠天地に通ふらん

四、長五百秋に榮え行く

瑞穂の國の高原の

沃土に昵む歡喜を

友と班ちて永却に

光榮あらしめん讚へなむ

吾等が樂土 上農寮

既刊・實業教育資料

1. 事變と支那法幣……………木村増太郎著 (絶版)
2. 滿洲の資源と産業……………粕屋益雄著 (絶版)
3. 農業學校の塾風教育……………長野縣上伊那農業學校編 (絶版)
4. 蒙疆と資源と經濟……………大島豊著 (絶版)
5. 統制經濟下に於ける中小商業問題……………安田元七著 (絶版)
6. 合成ゴムの話……………田中稻穂著 (絶版)
7. 代用品工業の現在及將來……………白井義二著 (絶版)
8. 工業學校實驗設備の計畫と運用……………奥谷久彦著 (絶版)

9. 商業學校の經營に就て……………赤木雅二著 (絶版)
10. 産業組合と産業組合教育……………青木一巳著 (絶版)
11. 理化教授と實驗器械の製作……………吉村賢著 (絶版)
12. 商業學校に於ける家塾教育……………東京府立第一商業學校編 (絶版)
13. 工業學校の機械科に就いて……………東京都立高等工業學校校長・清家正著 (残部あり) 定價 二〇錢 千四錢
14. 新體制實踐科に就いて……………岡山第一商業學校教授・中田豊衛著 (残部あり) 定價 二〇錢 千四錢
15. 農場即教場主義教授……………埼玉縣杉戸農業學校教授・城戸高子著 (残部あり) 定價 二〇錢 千四錢
16. 商業學校公民科の理念と運営……………岡崎市立商業學校教授・大野盛直著 (残部あり) 定價 二五錢 千四錢
17. 長野縣の實業教育……………實業教育振興中央會・倉橋藤治郎著 (残部あり) 定價 二〇錢 千四錢

259.5  
146

18. 商業學校に於ける作業教育……中山縣立第一商業學校教諭……中尾 壽 夫著  
 (残部あり) 定價 二五錢 千四錢

七四

19. 勞作教育論を基底とする林業教育の實際……北海道美幌農林學校教諭……山本 武著  
 (残部あり) 定價 六〇錢 千四錢

既刊實業教育資料は殆ど絶版となつてゐますが、最近版のものに限り少數の残部あり、購讀御希望の方は至急振替又は小爲替にて御申込み下さい。

發行所 財團 實業教育振興中央會  
 法人 振替東京一四三〇三九番  
 電話九段(33)四六七四、五〇七五番  
 東京都麴町區五番町五番地

昭和十九年六月三五日印刷  
 昭和十九年七月一日發行  
 (出版會承認四六〇〇四一)

實業教育資料20 價 七〇錢  
 上農寮に於ける熱風教育

不許  
 複製

編輯兼 倉橋 藤治 郎  
 發行人 東京牛込區原町一丁目六八  
 印刷者 東京都王子區神谷町一丁目四八二  
 (東京四四三八) 古川 一郎  
 印刷所 東京都王子區神谷町一丁目四八二  
 東京證券印刷株式會社

發行所 財團 實業教育振興中央會  
 法人 振替東京一四三〇三九番  
 事務局 東京都麴町區五番町五番地  
 電話九段四六七四番・五〇七五番

595
146

終